

学位被授与者氏名	井田 智美
論文題目	乳児院における家族再統合に向けての支援に関する一考察 —アタッチメント形成の問題に視点をあてて—
論文審査結果の要旨	<p>本論文は井田氏の長年にわたる乳児院での親子の関わりの中で蓄積された豊富な実践事例をもとに、乳児院における家族の再統合に向けてのアセスメントと支援の課題を明らかにしようとした論文である。本論文では紹介できなかったが、家庭引き取りになって数か月後に虐待によって脳挫傷の傷害を負い、乳児院に再入所することになった乳児の悲しい事例などを体験する中で、「このような悲劇を2度と起こしたくない」という井田氏の切実な問題意識が本研究の根底には存在していることを指摘しておきたい。</p> <p>本論文では家族の再統合の可能性をアセスメントする最大の基準として「親子の安定したアタッチメント関係の形成」を挙げ、乳児院における親子関係の観察などを通して、どこまで親子のアタッチメントの関係が築けているのか、また、親子のアタッチメント関係を維持していけるだけのサポート者の関係が築かれているのか、など、乳児院ならではの視点も含めた検討がなされており、直接に母子の相互作用を観察する機会が少ない児童相談所では明らかにしにくい視点が提起されている。</p> <p>しかし、多くの事例は出されているものの、一部の事例を除いて親子の安定したアタッチメント関係がどの程度形成されているのかを検討するために必要なエピソードが十分に描かれておらず、その点では仮説を裏付けるデータに不十分さがあることは否めない。</p> <p>また、今回の研究では家庭復帰という、狭義の意味で「家族再統合」に視点を当てているが、「たとえ離れて暮らしているとしても家族としてのつながりや絆は維持されている」という広義の「家族再統合」への支援も視野に入れた研究も求められているのではないか。</p> <p>さらに言えば、乳児院は基本的には子どもへのケアが中心であり、親子のアタッチメント関係の形成に必要となる、子どもの親自身の抱える発達課題や心的外傷体験の整理への支援などの問題にアプローチするための人的条件整備は現段階では不十分であるだけに、本論文で提起された課題を実践していくことは容易ではない。しかし、現在、家族支援機能の強化が社会的に要請されている乳児院の果たすべき役割を実践的に提起した点で社会的には大きな意義があると考えている。</p> <p>2022年2月17日に、審査委員全員出席のもとで、B教室202教室にて最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答のちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。</p>